The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	前置詞とその原義
Author(s)	上野, 義和
Citation	大阪外大英米研究. 1987, 15, p. 139-150
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99105
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

前置詞とその原義[1)]

上　野　義　和
(1986. 10)

語の意味変化はあらゆる国語に生ずる。たとえば，日本語の「しぶい」という形容詞は，本来「しぶい柿」，「しぶいお茶」などにおけるように，食べ物や飲み物を示す名詞と共起して「味覚」に言及する表現であった。意味変化が生じた結果，味覚とは一見まったく無関係の名詞，たとえば「しぶい色」，「しぶい車」などのように目に見えるものばかりか，「しぶい声」，「しぶい音」のように目に見えないものを示す名詞とも共起するようになった。しかし今日でも，「しぶいおでこ」，「しぶい新聞紙」，「しぶい太陽」など不自然な結合もある。これら許される結合と許されない結合とを隔てているものは，「しぶい」のもつ意味素性の一つである「味覚」という概念である。本来はあくまで「舌による味覚」であるが，それがあ同じ五感のうちの耳と目にも転用され，「耳で味わう」，「目で味わう」ということから，「しぶい」は「色」，「形」，「音声」などとも結びつくようになった，と考えられる[2)]。

このように，意味変化が生ずる場合には必ず原義[3)]が陰に陽に介在している。以下では，英語の前置詞 *with* をとり上げて，その現代英語における意味，用法に対して，原義がどのように作用しているかを概観してみることにする。

with は，たとえば次の文 (*Beowulf*)

(1)　Ic hine *sweorde* swebban nelle.

における *sweorde*(<*sweord* '(a)sword'+*e* 'with')に見られるように本来は名詞の屈折語尾で表わされていたものが，屈折語尾消失の代償として誕生したもので，OE では *wip* の形をしていた。その主たる意味は今日の *against* に相当するものであったが，ME 期には「同伴」の意の *mid* を吸収してしまう一方，旧義の力を弱めていくことになる[4)]。今日では *withhold*（引きとめる），

withstand（抵抗する）などごく少数の複合語の第一構成要素として，また *compete*, *conflict*, *contend*, *fight*, *quarrel*, *struggle*, *vie* 等の「戦う」の意の語と共起する *with*, get angry *with*（……に腹を立てる）の *with* などにその名残りをとどめているにしかすぎない。以下では現代英語の *with* の原義を「同伴」,「随伴」として論を進める。

——— I ———

（2）A: *Where* are my keys?

B: They are *with* your wallet.

（2）のような問答が成立することから，*with* には「場所」を示す力があるとみるのが G. Leech (1969. p. 164ff.), J. Lyons (1977. p. 693) などである。事実，（2）Bは意味上，次の（3）

（3）They are in / at the place in / at which your wallet is.

と等しいが，そこには何か論理の飛躍があるように思われる。もし *with* が純粋に場所を表わしうるならば，次のように，必ず場所表現を後置させねばならない *put* を使った問答も成立するはずである。

（4）A: *Where* did you put my keys?

B: *I put them *with* your wallet (and it's nowhere else).

しかし（4）Bは成立しない。が，もし（4）Bを次のように，

（5）I put them *beside*（また *in* / *by* / *under*) the desk, and they are *with* your wallet (and it's nowhere else).

と言い換えれば正しい文となる。つまり *beside*, *in*, *by*, *under* のような，純粋に場所を示しうる前置詞を先行させればよいということから，Leech の（4）Bは聞き手が wallet の存在場所を予め知っていて初めて成り立つということになり，いわば（4）Bは存在場所を間接的に表現しているだけであって，*with* それ自体には場所を直接的に示す力はないということになる。（4）Bは key と wallet との同伴状態を場所表現の如く述べた文であると考えられる。そして（4）Bに対する直接的な疑問文は "*With* what are my keys?" であろう。

——II——

現代英語における *with* の意味用法は多岐にわたるが，そのうちのいくつかを採り上げることにする。

（イ） 原義の「同伴」が最も自然に結びつきうるのは次のような概念を表わす語である：結合（combine, connect, link, ...）/出会い（encounter, meet, ...）/接触（contact, touch, ...）/知り合う（acquaint, familiar, ...）/混合（blend, mix, ...）/比較・対照（compare, contrast, ...）等。これらの語は概念上，必ず同伴物を必要とする。

（ロ） careful, generous, patient などと共起する *with:* careful は of, about, with と，generous は to(ward), about, with と，patient は of, with と共起しうる。たとえば，careful を例にとれば，

（6） a. Be careful *of/about* that dog.

b. Be careful *with* that dog.

（7） a. Be careful *of/about* your health.

b. *Be careful *with* your health.

となり，後続する名詞によって *with* が出没する。（6）の文（あの犬に注意しなさい）と（7）の文（自分の健康状態に注意しなさい）とを比較すると，'that dog' と 'your health' の相違点は，前者は主語（You）とは別個に存在しうるものであるということ，即ち両者は分離不可能な関係にある。それ故（6）bの（あの犬と同伴状態になった時には注意せよ）はよいが，（7）bは意味的（*自分の健康状態と同伴状態になった時には注意せよ）に逸脱した文になってしまう。ここに *with* の原義が生きている。上述したことは generous, patient にも当然あてはまる。例えば，次の文

（8） He is generous *with* his money.

は，「お金を同伴すると気前よくなる」の意である。ここで注意すべきことは「同伴」は「非同伴」に対応する概念であるということである。「同伴」の関係が生ずれば「非同伴」の関係も生じうる。従って（8）の文は次の（9）の文

（9） He can not be generous *without* money.

と意味論上深い関りをもっている。careful, patient についても然り（You don't have to be careful / patient *without* that dog.）。このことから，しばしば「……については」とか「……に関しては」という意味のもとに分類[5]されるこの *with* は，*without* をその反義語としてもつ，「同伴」の意の語であることが明白であろう。

（ハ）　文頭に生ずる *with*

(10)　*With* my father $\begin{cases}\text{he is patient.}\\ \text{he takes a walk after breakfast.}\\ \text{money is everything.}\end{cases}$

この用法の *with* と（ロ）の *with* とが同列に扱われることがよくある[6]。しかし，後者の *with* は（6）b の如く命令文に現れるが，後者の *with* にはそれが不可能である。その理由は，次の（11）のようには

(11)　**With* my father $\begin{cases}\text{he took a walk this morning.}\\ \text{he is reading a book now.}\\ \text{all his money has gone.}\end{cases}$

いえないことから，*with* が支配する NP についての習慣，習性，真理などを示す節が必要である，という点に求められよう。この *with* も，結局のところ，「同伴」の意をもつものにすぎず，ある習慣，習性，真理などが "With NP" 中の NP と同伴関係にあることを示すことは次の（12）からも明らかとなろう。

(12)　With my father $\begin{cases}\text{he takes a walk after breakfast.}\\ \text{all things are possible.}\\ \text{*my mother is patient.}\\ \text{*the earth goes around the sun.}\end{cases}$

（ニ）　付帯状況の *with*

(13)　Don't speak *with* your mouth full.

(13) における *with* を付帯状況の *with* と一般によぶ。"your mouth full" は "your mouth is full" という節を句で表わしたもので，この *with* も，ある行為とある状態との同伴関係を示す。同じ前置詞の *on* にもこれに似た用法がある。

(14)　*On* arriving at the station, he telephoned to her.

到着行為と電話をかけるという行為が連続して生ずることを示すこの *on* が 'as soon as（または when）' で置き換えられるのも，*on* の原義である「接触」

に由来するものであるからである。*with* も *on* も各々「同伴」,「接触」という相似た原義をもっているから相似た意味・用法が生まれるわけで，もし両語が原義と正反対の原義をもっているとすれば，各々（13），（14）における意味・用法が存在することはありえないのである。が，同時に，*with* と *on* は意味が似かよっているというだけで，全く同一の原義を共有するものではないことに注意しなければならない。たとえば，次の（15），（16），（17）

（15） John went there *with* Mary.

（16） John met *with* Mary there.

（17） Oil doesn't mix *with* water.

がそれぞれ次の（18），（19），（20）

（18） John and Mary went there *with* each other.

（19） John and Mary met *with* each other.

（20） Oil and water don't mix *with* each other.

のように言い換え可能であるが，他方次の（21），（22）

（21） The dictionary is on the desk.

（22） My book is on your book.

がそれぞれ次の（23），（24）

（23） *The dictionary and the desk are on each other.

（24） *My book and your book are on each other.

のようには言い換え不可能であることから，*with* の「同伴」は多くの場合，「対等」の関係を示しうることがわかる。それ故，（13）は「話す」ことと「口に何かが一杯入っている」こととが対等の関係であること（従って同時に生ずる）を示す[7]が，（14）は示せない。次の（25），（26）

（25） Is the movie still *on*?

（26） He ran *on*.

における副詞用法の *on* が「連続」,「継続」という概念（（25）その映画はまだ上映されているか，（26）彼は走り続けた）を表わしていることからも明らかなように，*on* には「対等」の概念はない。

（ホ）　原因・理由，逆説の *with*

(27)　He is in bed *with* a cold.

(28)　*With* all his efforts he failed.

(27)（彼は風邪が原因でふせっている），(28)（ありとあらゆる努力をしたにもかかわらず，彼は失敗した）の *with* を，それぞれ「原因・理由」，「逆説」として分類することは多くの英和辞典で行われていることである。が，前述した（イ）～（ニ）と比べて，（ホ）は少々異質の感を与えるようである。(27) を否定文にかえると逆説的意味の

(29)　He is no longer in bed *with* a cold.

(29)（彼は風邪であるにもかかわらずもはや寝床にいない）がえられるが，そこにはもはや「原因・理由」の意はない。

さらには，原義の「同伴」からどのようにして「原因・理由」，「譲歩」が生じたかが問題となろう。しかし，いくら前者と後者との論理的関係を考えようとも，それを満足させる意味変化の過程はないだろう。そのためには，原因・理由を示すいくつかの語を例に挙げてみるとよい。たとえば *because* は文字通り '*by*+*cause*' がその語源であるし，*since* はその原義の「時間的な起点（e.g. He has been ill *since* then.）」が転じて，「ある状態や行為の起点，即ち原因，理由」が生れたもの[8]である。「同伴」という概念には「原因・理由」を生み出しうるような意味素性や概念は存在しない。また

(30)　He did it, because / since he wanted to.

(31)　He didn't do it, because / since he wanted to.

のように *because* / *since* は肯定，否定を問わず「理由」を表わしうるが，*with*（(27)，(29)）ではちがうことなどから，結局 (27) の *with* を「原因・理由」と定義するのは文脈からであろうと考えられる。「異質」と前述したのはこういう理由からである。英和辞典でこの *with* の意味をどのように扱おうとも，そこには「同伴」の原義が生きている。(27) は「風邪を同伴してふせっている」の意であることは，この意味を，たとえば，*Longman Dectionary of Contemporary English*（1978. s. v. *with* 12 b）は 'because of having' として

いることからも裏付けられよう。

(31)　*With* John away, we've got more room.

(31) の "*With* John away" は形式的には (ニ) の付帯状況に属するものであろうが，文脈的意味としては「理由 (ジョンがいないので我々に余裕ができた)」が妥当であるところから，(31) もまた，同書では 'because of having' の例文となつている。同じ "*With* John away" が，たとえば次の (32)

(32)　*With* John away, we still have little room.

におけるように，後続する節の意味内容に応じて，逆説的意味 (ジョンがいなくなったにもかかわらず) になってしまうことも，この種の *with* の意味決定が文脈に依存したものである証拠になるだろう。

(ヘ)　道具を示す *with*

(33)　Now the acrobat is hanging only $\left\{\begin{matrix}{}^{*}with \\ by\end{matrix}\right\}$ his teeth.

(34)　The filled paper bag was suspended $\left\{\begin{matrix}{}^{*}with \\ by\end{matrix}\right\}$ one of its handles only, to show how strong it was.

(35)　The carpenter struck the nail $\left\{\begin{matrix}with \\ {}^{*}by\end{matrix}\right\}$ his hammer.

(33), (34) では *by*, (35) では *with* が正しい前置詞と判定される。これには，両語の原義の違いが大きく作用している。次の (36)

(36)　John sat *by* Mary.

にみられるように，*by* は本来，ある物体が別の物体の側面に対して位置することを示した。やがてこの意味を 'by the side of', 'by one's side' などの句表現に譲り，「ある物を中心にして，それをとりまく領域内にある比較的近距離の位置 (≒a little away from)」をその原義とするに到った。この意味変化は *beside* のそれに類似し，両語の中核的意味の差は単に「距離」の差にしかすぎない。しかし，この距離の差が両語の意味変化の相異なる部分に大きく関ってくる。たとえば *beside* の原義「すぐ真横 (≒right next to)」が「比較」の意を生む (John is short *beside* Mary.)。比較という概念が成立するためには，物理的であろうと抽象的であろうと，物と物とをできるだけ近距離に並びあわ

せることが必要であろう。他方 *by* には，このような *beside* がもつ明確な近距離を示す力はなく，前述したような「ぼんやりとした近接」しか表わせず，従って「比較」という概念を生み出しにくい。現代英語の *by* に比較の意味がないのはこのような理由が関係していると考えられる。*by* がもつ，この「ぼんやりとした近接」は，多くの英々辞典にみられる 'near, beside, a little away from' の如く，距離の定義に関してゆれが生じているのに対し，*beside* は多くの場合 '(right) next to' でゆれは生じにくい。この差は実際の用法にも現れ，移動行為の出発点を示す *from* との共起関係においても，'*from by NP' は成立しないが，'from beside NP' は成立するという結果になる。明確な位置は出発点になりうるが，不明確な位置は出発点になりえないことに関っている。しかし，このような漠然さ故に，*by* は *beside* に比べて多くの比喩的表現を生み易く，従ってその意味変化は *beside* のそれよりも数が多く，かつ複雑である。また，この漠然さが，実際の場面になると，たとえば次の (37)

(37)　The shell exlploded *by* the wing of the aeroplane.

におけるように，*by* よりも明確な位置関係を示しうる *over* や *under* の意味をその中に含みこんでしまう[10]（従ってそれらの代用になりうる）という便利さにつながる。

by の原義が「ある物を中心にして，それをとりまく領域内にある比較的近距離の位置」であることは前述したが，これを言い換えれば，(36) を例にとれば，Mary を中心に円を描けばその円全体の中のどこかに John が位置していることを表わしている。ここに「全体とその一部」という関係がみられる。(33) で *by* が正しい前置詞である理由はまさにここにある。ぶらさがっている軽業師の体全体を支えているものが，全体の一部である歯であるというのが (33) の命題である。(34) における紙袋とハンドル（取っ手）の関係も全く同様である。次の (38)

(38)　John $\left\{\begin{array}{l}\text{caught}\\ \text{seized}\\ \text{led}\\ \text{pulled}\end{array}\right\}$ Mary *by* the hand.

における *by* の用法も同一の観点から捉えられよう。

以上述べた by に対して with の原義はあくまでも「同伴」である。(ロ) で述べたように「同伴」関係が生ずれば，そこには「非同伴」の概念も存在する。(35) において *by* が不可で with が可であるのは 'hammer' とその使用者の関係は，全体とその一部ではなく，分離可能な関係（即ち同伴しても非同伴であってもよいもの）である。このことは，接触や打撃を表わす一群の動詞の定義[11]をみれば一層明らかになろう。

(39) kiss: to touch with the lips as a sign of love or greeting
lick: to take into the mouth with the tongue
slap: to strike with the flat pant of the hand

これらの *with* を *by* で言い換えることはできない。kiss, lick, slap などの行為には，軽業師と歯，紙袋とハンドルにみられるような，全体とそれを支える一部の関係はみられない。kiss, lick, slap で表わされる行為は，各々，唇，舌，手のひらによる行為にしかすぎない。ましてや，全体の一部と一部による行為 (to shade one's eyes with the hand ⟷ *to shade one's eyes by the hand) に *with* が選ばれるのは当然のことである。

ここで一つ問題がでてくる。上述したことが正しいとすると with の原義は「同伴」だから，たとえば lick では舌を同伴せずに，また kiss では唇を同伴せずに，ということがあるのかということである。これについては (39) の slap の定義があることを物語っているように思われる。手のひらで叩く，ということは体全体をその一部が支えて行う行為でないことは明白（ということは *by* は使えない）であることは勿論，「手のひら」は手そのものというより「手を開いた状態」という，手の一状態を示すものである。つまりは，手そのものを道具にというより，手に関する一種の付帯状況的な状態を示すものであろうということである。類語の一つである punch も 'to strike (someone or something) hard with the closed hand' と定義されることになる。

以上述べたこと，および wing（鳥のつばさ）が次の (40)

(40)　wing:　one of the 2 feathered limbs by which a bird flies

のように *by* を用いて定義されることなど，by，with の用法の違いは両語の原義にさかのぼったものであることがわかるだろう。なお，with，by に対応するように他の前置詞がよく似た状況で使われる場合がある。つぎの (41)

(41)　a bird flying *on* its wings

における *on* は with を使った場合とは全く別種のいい回しで，'to lie on one's stomach(back, side)'，'to stand on one's hands(head)'，'to crawl on all fours(on hands and knees)' などと同様，生物の胴体を体全体の中核とみなす表現で，胴体がその付属物である手，足，頭，腹などにのっかっていることを示す表現である。

(ト)　break，part 等の分離動詞と共起する *with*

(42)　John broke *with* Mary.

(43)　John doesn't want to part *with* his car.

(42)（ジョンはメアリーと手をきった），(43)（ジョンは車を手離したくない）における *with* を from（分離の出発点）で言い換える（たとえば *Longman Dictionary of Contemporary English* s.v. with 10.）のは通例であるが，これはあくまでも辞書的な便宜にすぎない。「分離動詞＋*with*」は「……との同伴関係をこわす」の意ととるべきで，その証拠に with がその原義の「同伴」と正反対の「非同伴」や「分離」の意をもったことは英語の歴史にはない，という事実をあげることができる。そして，たとえば (42) はつぎの (43)

(43)　John broke rlations *with* Mary.

の省略形と考える方がまだしも論理にかなっているだろう。

———×××———

前置詞 *with* を例にとり，語の原義がその語の意味変化にいかに深く関っているかを述べた。含意 (implication) という概念によって説明可能な意味変化（たとえば *with* であれば，「同伴」に対する「所持」，「所有」）もあれば，文脈依然（たとえば II (ホ)）のものもある。が，いずれの場合も，その源泉は原義である。特に抽象概念を示す語の場合には，その意味変化の段階の数が多

いほど，原義と最終段階の意味との間の隔りが大きくなる可能性はあるだろうけれども，各段階を逆戻りして行けば結局は原義にたどりつくことは，たとえ場，*nice* という語の意味良化（semantic amelioration）や *silly* の意味悪化（semantic deterioration）などの有名な例がその証拠となりうるだろう。

注

1) この小論は近代英語協会第四回大会（1986年5月16日，於甲南大学）での口頭発表に基ずくものである。
2) 「*しぶいおでこ」は不自然だが，「しぶい形のおでこ」は不自然さがいく分減少する。「おでこ」には通常，さまざまな種類や変化が容易に期待される要素がないが，それでもその可能性が全くなくはない，ということに理由を求めることができる。しかし，太陽のように唯一の形でしか存在しえない物に関しては，「? しぶい太陽」，「? しぶい形の太陽」はいずれも不自然となる。また，「しぶいのど」ののどは声をさすこと，「しぶい車」は車の形や色をさすことから，「しぶい」が修飾するものは，名詞句のもつ形，色，音声（即ち味わえるもの）に集約されると考えられる。
3) ある語に意味変化が起った時，新しい意のもとになる意味をさす。「しぶい」における「味」という意味素性，*crane*（鶴→起重機）における鶴の外形（食べものをくちばしで持ち上げる動作）なども含む。
4) *with* が mid の意味を吸収した原因は，古代スウェーデン語やラテン語の影響もあったかもしれない（小西（1970. p.135））が，両語の意味がきわめて類似していたことにあるのではないかと考えられる。*with*（=against)のもつ，二つの物が互いに衝突しあうという意味と *mid* の同伴（さらには後述する「対等」）の意が相通じあうことが第一の要因であろうと考えられる。
5) たとえば *New English-Japanese Dictionary*（研究社）.
6) たとえば *New English-Japanese Dectionary*（研究社）.
7) それ故，With these words he went out. は「こう言いながら出ていった」の意で，「こう言ってから出ていった」ではない。
8) 池上（1981）. 原因，理由に対する概念は結果であり，前者と後者の関係は，たとえば出発点と到達点の関係として捉えることは自然であるが，対等の意を含む同伴という概念には，上記のような論理的関係はみい出せない。
9) たとえば *Pocket Oxford Dictionary*, *Longman Dictionary of Contemporary English* など。
10) Leech(1974). pp. 131-132.
11) *Pocket Oxford Dictionary*, *Longman Dictionary of Contemporary English*.

参 考 文 献

Ikegami, Y., *'Suru' to 'Naru' no Gengogaku*, Taishukan, 1981.
Konishi, T., *Zenchishi*, Kenkyusha, 1970.
Leech, G.N., *Towards a Semantic Description of English*, Longman, 1969.
———, *Semantics*, Penguin Books, 1974.
Lyons, J., *Semantics* 2, Cambridge University Press, 1977.

———×××———

Longman Dictionary of Contemporary English, Longman Group Ltd., 1978.
New English-Japanese Dictionary, Kenkyusha, 1953.
The Oxford English Dictionary, Clarendon Press, 1978.
The Pocket Oxford Dictionary, Clarendon Press, 1961.